

幼児信仰の可能性について

齊藤良子

はじめに

幼児はキリストの福音を自覚的に把握できないから信仰をもつことは不可能であるとする者も、また幼児の信仰は単に大人のまねごとで過ぎないのではないかと疑問をもつ者もいる。この点が明らかにされず、確信のないままに幼児教育がつづけられている現状である。もし幼児に信仰があるとすればそれはどのようなものであり、どのような教育的配慮を必要とするのかが明らかにされねばならない。この小論においてこれらの問題を究明していきたい。

幼児期の特性

幼児期を広義には新生児から六才頃までとし、狭義には三才から六才までとするが、この小論においては後者をとる。

幼児期は児童期へ至る発達過程の一段階であって、身体的にも知的にも社会的にも霊的にも未熟である。しかしながら性格の基礎は三才から六才までの間に確立されるといわれ、教育上きわめて重要な時期である。幼児期の不健全な愛情関係が生涯根絶できない傷痕をのこすことは周知の事実である。病態的不安や青少年の犯罪もまた解消されない幼児期の心痛の表出であるといわれる。健康な人々の性格は、不健康な人々のそれと同じく、基礎的には幼児期に形成されるのである。¹

幼児期には知能も自意識もまだ情操とよばれるようなものを保持しうるまでに発達していない。特に宗教情操というような高度で複雑な精神組織はもっとも未発達の状態にある。このため幼児にみられる宗教的な諸反応は決して宗教性を帯びているのではなく、全く社会的な性質のものである。それらはおじぎをしたり手を合せて頭をたれるという習慣に始まり、やがて簡単な祈りをしたり賛美歌をうたうことを覚えてゆく。これらは幼児にとって歯を磨いたり手を洗うことと同じく両親から教え込まれた諸習慣に過ぎない。たとえその意味が分からなくても両親から言われた通りに行動するのである。²

幼児の未分化な心理より生ずる思考様式の第一は自己中心性である。彼にとってすべてのものは自分を中心にならわっている。それは幼児のあらゆる知覚と感情が自我性という感覚に育ってゆくからである。彼の関心はいつも自分自身であって、自分と他人の区別が明瞭でない。このような状態から次第に他人が分化し、客観的規準に従って行動するようになると幼児の域を脱して児

注、 1) ゴートンW. オルポート、人間の形成、豊沢登訳(理想社、昭和45年)、PP.80~81。
2) 個人と宗教、原谷達夫訳(岩波現代叢書、1953)、PP.31~32。

童期に入ったといわれる。

幼児の未分化な心理より生ずる思考様式の第二はすべての物は自分と同様生命があって生きていると考えることである。このアニミズム的傾向は未開原始人の中にもみられるが、幼児の場合特に著しい。太陽は生きており、いつも自分のあとについて来るというたぐいである。

幼児の未分化な心理より生ずる思考様式の第三は現実と想像の混合である。想像したことが実際に存在すると考える。彼の切実な願いはいつの間にか現実のものに変身する。外からみると嘘をついているように思えることがあるが、実は想像の世界のことが現実の世界にもち込まれているのである。³

幼児にとって実在しないものを実在しているかのように信じることは容易である。したがって神を信じ天国の存在を信じることはむずかしくない。しかしこれらの未分化な思考様式は発達の過渡的現象であって、やがてはより分化した状態へと変化してゆく。幼児の示す信仰とよべるような動作や態度はオルポートの言うように幼児独特のものであって、キリスト教信仰とはかなり異なったものである。主観的、恣意的な神認識しかもたない幼児には福音を自覚的に把握することはできないからである。

フロイドなどの精神分析学の流れをくむ一部の人も幼児の宗教心を心理現象として認めながらも、結局それは信仰といえるものではなく、人間の成長発達の過程にあらわれた人間経験の心理形態なのだという。また自覚的信仰を強調するアナ・バプテストの人々は幼児の信仰は不可能であるとして幼児洗礼をまっこうから反対する。⁴

先にも述べたがオルポートは成人の標準から判断すると幼児の経験の世界は特殊であるからその突飛な現実感にとまどうことがあるという。それは幼児の感覚、苦痛、快楽が大人のと著しく異なっているからではなく、幼児の解釈の仕方が全く独特であるからだという。大人には一本の棒にしか見えないものが幼児にはかわいい人形であったりする。大人には不思議に思えることが幼児には当りまえのこととして受け止められている。だから幼児の宗教は大人のと違った特別なものであるというのである。⁵

幼児期は **question box** といわれるように何でも知りたがる時である。探究心がつよく、何でもいぢりたがりこわしてしまう。その探究心が自然界や世界の支配に向けられて質問となる。幼児の探究心が大人の無理解によって打ちくだかれることがなく、いつも適切な解答が与えられることは教育上大切である。外界に対する探究心を正しく養い育ててゆくとき、それはやがて信仰の基礎ともなるのである。もし適切な解答が与えられないと、幼児は勝手に発明する。ピアジェは大人が答を与えても部分的にしか聞かれず、不正確にしか理解されないことがあることを指摘している。⁶

注、 3) 山下俊郎、児童心理学、(光文社、昭和43年)、PP.70~74。

4) 日本基督教団宣教研究所、キリスト教幼児教育の原理(日本基督教団出版局、1969)、P.73。

5) ゴートンW. オルポート、前掲書、P.31。 P.152。

6) J. Piaget, The Language and Thought of The Child (Harcourt Brace and Co.,

幼児期は他者依存のときである。他者依存の対象は両親や教師であることも太陽や月などの自然物であることもある。幼児にとって両親や教師は権威をもった存在であるから、彼らから与えられた答は絶対的だと考える。そしてこの権威の価値規準をそのまま取り入れようとする。このことは人間形成上重要な意味をもっている。

幼児の生活は遊びにはじまり、遊びに終る。他の子どもたちと遊びながら他人に対する愛情が培われてゆく。エゴのかたまりのような幼児であるからすぐに喧嘩がはじまり、攻撃的になるがこうした行動を通して他人への理解が深められてゆく。信仰教育は静かで厳肅なところでしかできないのではなく、遊びの中で幼な児の心にふれながら話しあうこともできる筈である。社会性も子ども同志が身体全体をぶっつけながら遊んでいる中で身につけてゆくものである。遊びは幼児にとって学習の場であり、また生活の場でもある。

幼児と語るときには抽象語を用いないように注意することが必要である。具体的な行為を示すことばを使うべきである。たとえば「正男ちゃんにやさしくしてあげて」というより「正男ちゃんもソーソーに乗りたいのよ」といってその子の立場をはっきり理解できるように語りかけることである。

以上幼児の特性を考えながら幼児期の役割は何かを考えてみた。人間形成の基礎を確立する幼児期にどういふ信仰教育を行うべきであろうか。将来の信仰生活の基礎となるものをどのようにして築きあげていけばよいのか。次にこれらの問題について聖書の中から学んでゆきたい。

聖書時代の幼児教育

幼児は純真で汚れを知らない者と考えられがちだが、聖書は幼な子も一個の人間として被造性、墮罪性を有しており、神の前では大人と同様罪人であると教えている。またすべての人間は原罪を背負っているからキリストの救いが必要だという。こと罪に関してはおさないからといって幼児を大人と区別してとり扱ってはならないというのである。

聖書の中には「子ども」とか「幼な子」ということばが度々出てくるが、これらはあまり厳格な意味で使い分けられていない。原語からみて大抵の場合幼児と児童の両方を含んでいるようである。心理学や教育学では幼児と児童を厳密に分けて考えているが、聖書の中では特別な区別はみられない。「子ども」とか「幼な子」という場合には子どもは大人とどう違っているかを示しているようである。

コリント人への第一の手紙十四章二十節に「兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。」と書いてある。ここでは考え方では子どもとなってはいけないと幼児性、児童性を否定している。子どもは「かくあるべき状態」からほど遠い状態にいるという考え方である。「幼子らしいこと」と「子どもっぽい考え方」を拒否しているのである。またコリント人への第一の手紙十三章十一節に「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。」とある。パウロは決して子

ども全体を拒否しているのではなく、ただ児童性、幼児性を拒否しているのである。

アウグスティヌスもカルヴィンも子どもの罪性に目をとめ児童性、幼児性を否定しながらも教会における児童教育の責任を重んじていた。アナ・バプテストは人間における罪の自覚と赦しの教理を強調したので、子どもは罪を自覚することができないから救われないという結論に達して、幼児洗礼を禁止したことは前章に述べた通りである。しかしこの場合でも子どもそのものが教会からしめ出されたのではない。子どもたちに出来るだけ早く宗教的経験をさせることを配慮しているのである。

クリスチャンの教育者として知られるフレーベルやベスタロッチは、幼児をそのあるがままの姿でとらえ、愛をもってその内にあるものをのばしてゆこうと試みた。子どもの中に人間の理想像をみとめようとしたのである。

マルコの福音書十章十四節の「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」というみことばやマタイの福音書十八章三節から五節までの「まことにあなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。」というみことばをもって子どもの純真、正直、従順などの美点を高く評価し過ぎ、子どもこそ人間の理想像だとする児童観が生れた。そして遂に“Child is the father of man”ということばさえ出て来たのである。

キリスト教が文化の低流となっているヨーロッパの教育史を眺めると、中世では人間は生れながら罪悪を背負っているから肉体を打ちたたき苦しめることが精神を浄化する唯一の方法であると考えられ、教育の場において体罰、とくにむちが用いられた。これは欲望や快楽追求は人間の肉体に結びついた根本悪であると考えられたからである。神の恵みにあずかり罪からのがれるためには、ひたすら神の前にひれ伏し神の命令に従うことが重要であると教えられた。しかし近世になると人間そのものの価値や尊さが発見され、子どもはそれ自身の中に尊いものを持っているから、それを外部から抑圧するかわりに自由な活動を許し、自発性を尊重することが正しい教育方法であるという考え方へと変って行った。従来のは詰め込み主義に陥らないで、子どもがみずからの活動によって知識を発見するのを待とうということになってきた。これは子どもの本性が善であるという考え方、すなわち前にも述べたように子どもをあまりにも高く評価しすぎた結果である。

以上のように幼児観、児童観の中には相反する二つの見方があるが、聖書中心のキリスト教教育においては小さな子どもといえども罪から救われなければならないことを指摘し、キリストが十字架上で流された尊い血潮による以外に救いはないと繰返して教えている。

幼児教育においてもっとも重要な教育の場は家庭であり、両親は教師としての責任をになわさ

注 7) 日本基督教団宣教研究所、前掲書、PP.78~79.

れている。エペソ人への手紙六章一節に「こどもたちよ。主にあって両親に従いなさい。」とあり、三節に「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きするという約束です。」とその恵みについても述べられている。教師としての親はまず自分自身が真の導き手である神に従い、神によってとのえられる必要があることは申すまでもない。家庭教育で大切なことはおさない中に両親に従順にしたがうということの重要性を徹底的に教え込まれることであった。

家庭における厳格な聖書教育はユダヤ社会において伝統的に受けつがれていた。旧約時代においては親がこどもを服従させるのは人間が神に服従するのと同様な意味で行われたが、新約時代にはそれが主の教育と訓戒によって行われるようになった。こどもを教育し、霊的成長を助けるためには親子の間が命令—服従というよりむしろ愛情—服従の関係にあったという点に注目すべきである。親の権威を振り廻してこどもを叱責するのではなく、こどもの人格を尊重しながら、主の教育と訓戒によって育てたのである。

聖書の中にこどもの信仰を疑った箇所を見出すことはできない。家庭の中でこどもはいつも信仰教育の対象として考えられていた。幼児の信仰は可能であるということを前提にすべてが考えられたのであろう。信仰を人間の側の自覚的意識にだけ局限して考えることは誤った近代主義である。むしろ人間の自覚以前における神の恵みの優先を認識することが正しい信仰の把握ではなからうか。初代教会のクリスチャンはこどもを一個の人格として認め、神の恵みのよびかけに応答し得る存在であることを疑わず信仰教育を行った。現代の教育学においてもいわれるようにこどもは人格として取り扱われるとき人格になるのである。

聖書を通して学ぶことは、クリスチャンの家庭に生れたこどもは、その存在そのものが両親の信仰を通して神の恵みの中にあり、救いを約束されているということである。故にその恵みにこたえるにふさわしいこどもとして育てることは両親の責任であり、義務である。

キリスト教幼児教育の可能性

キリスト教の信仰は神の側の働きかけを受けとめ、それによって人間が神との生きた人格的關係を結ぶことである。すなわち十字架上のイエス・キリストによって具体的に示された神の愛のよびかけに人間が全人格をもって応答するという経験を指すのである。⁸

一般教育の世界に一種の主知主義という傾向があるように、キリスト教界においても「信仰」を「知能」の働きだとみなす傾向がある。福音の自覚的理解や聖書の知的研究だけが信仰だと考えるのである。こういう考え方をする者は幼児に信仰を望むことは不可能だと決めつけ、キリスト教幼児教育無用論を唱える。たとえば幼児が信仰とよべるような動作や態度を示しても、それは大人のまねごとで過ぎないという。キリスト教の信仰は、イエス・キリストに啓示された神、十字架と復活、聖霊の存在、教会のキリスト論的把握という一連のキリスト教教理が分らなければならぬから幼児には到底無理なことだと主張する。幼児の特性である「他者依存」の表現とし

注、 8) 馬場嘉市編、新聖書大辞典(キリスト新聞社、1971)、P.718.

て手を合せたり、祈ったりしても、それを直ちに信仰とよんではいないという。それは幼児の未熟な過程における素朴な心理経験に過ぎないと説明する。

しかし幼児信仰の問題は聖書の光に照らして考察しなければならないのであって心理学的、実存論的に究明すべきでない。人間の自覚的把握以前における神の恩寵の優先を認めることが信仰の第一歩であることは既に述べたが、幼児はイエス・キリストの十字架を感覚的、情緒的に未分化のまま受入れるのである。神のよびかけに対して未熟なパーソナリティで反応を示している。キリストの福音は永遠不変の真理であるが、その真理が成長発達的一段階であるおさなごによって受けとめられるのである。換言すれば、幼時はその特性をもって信仰するのである。たとえ大人の信仰とは異っていても不思議ではない。大人は自覚的、意志的、主体的に福音の内容を確認し、受容するが、幼児はパーソナリティの下部構造において神の恵みを受容している。何故ならば幼児のパーソナリティの上部構造はまだ完成していないからである。⁹ 神のよびかけの受容を可能にする絶体的要因は神の側にあるということをおぼえてはならない。

幼児は心身ともに未熟で自立できないからいつも他者の援助を必要としている。信仰においても他者によって教えられ、与えられるのであるが、それはやがて内面化され、主体的なものとなることを確信するので、家庭や教会学校において福音が語りつづけられるのである。人間の教師は神の究極的な働きかけを待ち望みながら、微力を尽して神の救いの御業に協力、奉仕する存在である。キリスト教教育を考える場合、人間の中にある創造的な力を否定してしまうことが問題ではなく、被造物としての人間の能力が、どのように限界づけられるかということが問題にされなければならない。人間の努力はなんら力のないものであるが、それが一度神の恩寵によって捉えられるとき人間の成長発展に影響を与えることができるのである。¹⁰

未分化な思考様式を特徴とする幼児の信仰には怪奇な空想が満ちている。教師の話の中からむずかしいことばを避け、親しいことばだけを取りあげて自分勝手な意味をつくり出すことがある。神は白髪の老人であるとか、手には杖を持っているとか、またスーパーマンのように世界中を飛びまわることができるとか考える。しかしながら何時までもこの段階に止まっているのではなく、脱皮をつづけながらより真実なものをつかみながら成長発展してゆくことに目を向けるべきである。こういう成長発展の時期だからこそきわめて重要な意味をもつことを忘れてはならない。

福音の内容は不変の真理であり、それが変化しつつある幼児のパーソナリティによって受けとめられ、反応が示される。幼児は幼児のパーソナリティにおいて信仰が実存するのである。そこで幼児にふさわしい信仰教育の方法が考えられなければならない。幼児の特性にそくしたアプローチを研究することは大切である。

既に述べたように幼児は幼児らしく信仰する。三才児は三才児にふさわしい仕方信仰し、六才児は六才児の仕方信仰する。一つの段階を充分に経験した時に自然に次の段階へ進んでゆく。

注、 9) 日本基督教団宣教研究所、前掲書、P.91.

10) 小林公一、キリスト教教育(日本YMCA同盟、昭和33年)、P.90~91.

現在の段階を十分に経験することなしに次の段階へ進むことはできないというのは一般教育と同様キリスト教教育の原則でもある。

キリスト教の中心課題はキリストの愛であるが、幼児には愛というような抽象的なことばを理解することは困難である。キリストの愛を教えようとするとき、幼児はまず人から愛されるという経験を必要とする。両親から愛される経験なしに一足とびに自己犠牲的の愛に到達することはできない。家庭における基本的欲求の充足は幼児に満足感を与え、それはやがて親に対する信頼感とか愛情となってあらわれる。両親のおさなどに対する配慮が、幼児の成長発達とうまく合致するタイミングはキリスト教教育においても重要な意義をもっている。¹¹

人間が神の賜物を受けるためには新生における人間の意志の働きを要する。このような決定的な働きは自然の中には存在しない。訓練とか修養によって獲得し得るものでもない。神から生まれたというはっきりした確証を得るまでは霊的新生はないのである。しかし霊的誕生の前に胎児期の発育がある。キリスト教幼児教育において特にこの点が考慮されなければならない。霊的胎児期の発育がある。キリスト教幼児教育において特にこの点が考慮されなければならない。霊的胎児期が非常に長い場合と短い場合とがあるが、両親や教師はこのことを心に留めて導いていかななければならない。¹²「時が熟し」「時が満ちた」ときに、被教育者が神と対決し、信仰に入ることが決断するのであるから、両親や教師はこの時まで忍耐をもって待たなければならないのである。¹³

すべての植物がその土壌の性質に深く依存しているように、幼児のもつ土壌の質を知ることが大切なことである。幼児の内なるものを全く無視して一方的にみことばの種をまきちらして満足してはならない。祈りと十分な準備はどんなに貧しい土壌にでも正しく種をまくことを可能にする。

さいごに、キリスト教幼児教育は信仰教育と人間教育との両面から考えられなければならない。自らの罪を自覚して信仰告白をする能力をもたない小さなこどもの場合には、キリスト教による人間教育が多くなされることは止むを得ない。しかし究極の目的は成人の場合と同じく新生であり、また霊的成長であって、おさなどの中にキリストの形が形成されることである。

注、11) 桂広介監修、人格の発達 (金子書房、昭和48年)、P.257.

12) ロイス・E・ルバー、キリスト教の教育、多井一雄訳 (いのちのことば社、昭和46年) P.163.

13) 小林公一、前掲書、P.93.